

「市史執筆のブレイクタイム(21)」 濱田又四郎(1813—1905)

市史編集委員長 田村公利

今日は、近世末から明治末までを生き、鼻前カツオ漁の盛期に「一本釣りの神様」尊敬され、その勝れた漁労技術で長年船頭として活躍した養老浦・濱田又四郎について取り上げたい。

又四郎は、養老浦漁師・浜田藤兵衛の長男として文化10年(1813)、近世末カツオ漁で栄えた養老浦に生まれた。父が漁師であった関係から子どもの頃よりカツオ船に乗り、沿岸でカツオ釣りに親しみ、その漁労技術を磨いてきた。漁労技術は天性の才能があり、10代中頃、宇佐浦増木屋が養老浦に出張を置き、カツオ漁をしたときに船員として雇用されて高評価を得た(註1)。



昭和初め頃の養老浦

その後、三崎浦・橋屋が養老浦に出張を置き、カツオ漁を行った際には、若干19歳で船頭に抜擢された。以来20数年間、40歳代まで船頭として活躍し、その漁労技術は神技と言われた。養老浦を含む伊佐・松尾・大浜・中浜・清水・越の7ヶ浦所属のカツオ船の中で水揚げ尾数が船頭又四郎の率いるカツオ船がトップであり、出漁ごとに多い時には、3,000～4,000尾を釣り上げた。清水浦分一役所から褒賞を受け、その証として度々大漁旗を授与した。また、土佐湾沿岸域の浦々でもカツオ漁獲高が3年連続首位・優勝し、時の土佐藩主から袴・袴・脇差・朱盃などが賞賜された(註2)。



濱田又四郎夫婦の墓碑

性格が豪放磊落でリーダー性を備え、優れた漁労技術を持った名船頭として名を馳せた。体格も大きく、身長六尺(約180cm弱)・体重30貫(約112kg弱)・足サイズは12文(約29cm)であった(註3)。又四郎は93歳で没した。その墓碑は養老にあり、銘文正面には「濱田又四郎夫婦」と刻まれている(註4)。

註

(註1) 中山進『土佐清水市史上巻』土佐清水市、1980年、869—871頁。

(註2)～(註4) (註1)に同じ。

イベント情報

「令和3年公民館サークル文化展」2月20～23日

2/20～22 (9:00～17:00)、2/23 (9:00～13:00)

本年度は、コロナ禍もあり参加サークルが12団体になりましたが、基本的なコロナ感染対策を講じたうえで開催します。

参加団体の土佐清水市郷土史同好会は、土佐清水市教育委員会の取り組む旧大津小学校の学校史資料を整理・保存活動を支援してきました。今回はその成果を踏まえて「旧大津小学校展」と題して企画展示を行います。是非ご覧ください。

編集後記 “母に誓った『新市史』編さん”

私こと。今月12日、母の1周忌を迎えようとしている。亡くなる3ヶ月前のこと、母は正月を間近に脳梗塞で入退院を繰り返し、やっと自宅に帰ってきた。自分の命が風前であることを私に漏らした。私は『新市史』があと3年で完遂するので、何とかそれまで生きてほしいことを母に伝えた。そして、「完遂した『新市史』を手にとって見てほしい」と言葉を加えた。

仕事に行く前と、帰ったときに、母の介護用ベッドに行き、毎日声をかけた。日ごとに体力がなくなっていく母であったが、あるとき「私には心に決めちようことがある」と口角を引き締め、気力でそれを私に何回も繰り返し伝えようとした。

母は心に決めている内容を言葉に出して言わなかったし、私も直接聞かなかった。しかし、親子である。母が私に伝えたかったことを私は分っていた。それはきっと「市史編さんが完成するまで私は生きる、なんとしても生きたい！」という強い決意と誓願の思いであったに違いない。母は、朝夕私に会う度に、この言葉を繰り返した。最後の気力をふりしぼった、気迫のこもる言葉であった。「一人息子の責任ある仕事を見届ける」という母の命の時間との壮絶な戦いであり、その覚悟の発露でもあった。その烈々たる言葉は、今でも私の耳朶に焼き付いて離れない。

令和2年度も間もなく終了し、編さん事業も来年度からいよいよ後半戦となる。コロナ禍の混迷した情勢ではあるが、課題であった中世山城調査、戦争遺跡調査も精力的に進められている。地元郷土史同好会の皆様のご尽力や地域の方々のお支えもあって力強い。こうした皆様のおかげで何とか年度中に調査が完了しそうである。

また、年度末にかけて各執筆委員のラストスパートが見られ、原稿の提出枚数も少しずつ増えてきた。総頁数は3分の1に縮小され(2000頁余り⇒720頁余り)、コンパクトにはなったが、改訂までの40年余りの研究成果と新たな知見と切り口を加えた『新市史』が令和4年度末には誕生する。

『新市史』には、これに関わるすべての人々の熱い思いが込められている。そう思うと胸にこみ上げてくるものがある。

「市史編さん便り22号」で紹介した『旧市史』の調査に関わった谷口保之さん、
市史改訂の礎を築いた故中村春利元郷土史同好会会長、
監修を快くお引き受けいただいた故前田和男元県文化財審議会会長、等々。

私たちは、ご尽力いただいたすべての方々のお熱い思いを胸に、市民の期待に応えることができる「市民のための基軸書(『新市史』)」を精力的につくりあげる責任と使命がある。

(市史編集委員長 田村公利 記)